

相談援助実習における OSCE (客観的臨床能力試験) の試験項目

— 学生及び評価者による評価から —

○ 北海道医療大学 巻 康弘 (8616)

近藤尚也 (北海道医療大学・8798) 川勾亜紀奈 (北海道医療大学・7028) 福間麻紀 (北海道医療大学・5519)

松本 望 (北海道医療大学・8530) 鈴木幸雄 (北海道医療大学・0038)

キーワード：OSCE 社会福祉士養成教育 相談援助実習

1. 研究目的

社会福祉士養成教育においては、より高度な実践力養成の観点から、相談援助実習の重要性が高まっている。実践力養成において重要な要素となる技術・技能を評価する方策として OSCE (Objective Structured Clinical Examination) がある。OSCE は、医学・歯学等の医療分野では共用試験が実習前に行われるなど広く一般化している客観的臨床能力試験である。社会福祉分野では、久能ら(2009)の研究や社会福祉士養成校協会北海道ブロック(以下北海道ブロック)(2011)での取り組み等があり、北海道ブロックでは、相談援助実習における実習前評価システムの主要要素として施行の申し合わせがなされている。

大滝(2007)は、OSCE の特性について「『技能』を評価するには、OSCE は筆記試験よりはるかに妥当性が高い」ものの「個々の臨床技能は特異性が高く、ある技能ができたとしても他の技能ができるとは限らない」と述べている。この観点からすると、北海道ブロックにおける実施状況は、概ねひとつの試験項目での実施となっており、十分とは言えない。

そこで本研究では、多様な技術・技能を評価する 3 つの試験項目 (①インテーク面接、②アセスメント報告、③実習日誌記載・提出) による OSCE を実施し、実施状況に対する学生及び評価者への調査から試験項目に対する評価を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

相談援助実習における OSCE の試験項目は、厚生労働省から示された「相談援助実習のねらいと含まれるべき事項」に基づく北海道ブロック相談援助実習評価表の技術・技能に含まれる項目から設定するとこの視点から課題設計を行った。各試験項目は、①「地域包括支援センターの社会福祉士によるクライアント(事前予約有)とのインテーク面接」、②「ある施設・機関の社会福祉士実習生によるカンファレンスでのアセスメント報告」、③「実習生がメモの取れない実習体験後に記載したメモをもとに、実習日誌を記載・提出する」設定とした。試験項目毎に指示内容、試験時間、評価項目、試験問題を設定した OSCE を、相談援助実習履修学生(n=101)に対し、2015年6月2日(実習日誌翌朝提出)に実施した。

学生アンケート調査は、インテーク面接及びアセスメント報告を OSCE 終了直後、OSCE 全般及び実習日誌記載・提出を 1 週間後に実施し、OSCE 受験学生(n=99)全員から回答を得た。また、評価者 30 名(外部評価者 18 名含む)に対しては、OSCE 当日に振り返り会を実施し、逐語録を作成するとともに、記述式アンケート調査を実施した。本研究では、学生及び評価者調査結果から「試験項目に対する評価」に関わるデータを抽出し検討した。

3. 倫理的配慮

学生には、アンケート調査は無記名で行い、結果は、統計的な処理を施し個人が特定されないこと、研究目的以外に使用しないこと、研究への協力は学生の任意であり、研究協力しないことでの不利益は生じないことを書面と口頭で説明し、提出を持って同意を得たこととした。評価者には後日文章で説明し、全員から同意を得た。

4. 研究結果

学生調査では、「OSCE の形式でスキルが測られるのは、有効であると思いますか」との問いに対し、「有効である」54.1%「まあまあ有効である」38.8%を併せた92.9%の学生が、「(まあまあ)有効」と回答した。試験項目の構成要素別では、「適切である」「まあまあ適切である」を併せた「(まあまあ)適切」との回答が、試験問題では、インテーク面接96.9%、アセスメント報告92.8%、実習日誌記載・提出87.9%。試験時間では、インテーク面接94.9%、アセスメント報告90.8%、実習日誌記載・提出88.8%であった。評価項目では、インテーク面接100.0%、アセスメント報告96.9%、実習日誌記載・提出95.9%。指示内容では、インテーク面接97.9%、アセスメント報告97.9%、実習日誌記載・提出83.9%であった。

評価者調査からは、「以前より力量アップを感じます」との経年的変化に関する内容や、「みんなよく準備してきたなというのが分かった」「どこがポイントかおさえきれていない学生は表面的な情報が中心になる」との評価すべきポイントが明確化しているとの認識がうかがえる内容がみられた。また、インテーク面接は、受入の態度に関する「導入部分はほとんどの学生が出来ている」が、「冒頭の一連の流れが長い。面接技法の評価が実質的に4分程度」となり、「主訴をピンポイントで理解するというのは難しい」と、導入部の簡素化といった評価項目の見直しに関する内容も多数みられた。アセスメント報告については、「準備状況がはっきりとわかる事例であった」との試験問題に対する評価が得られた。さらに、「質疑や話し合いのプロセスを体験させる仕組みにした方が良い」「セッションしてはどうか」といった設定や評価項目に対する意見がみられた。

5. 考察

学生及び評価者の評価によると、学生は「OSCE形式でスキルが測られる」ことを9割以上が肯定的に捉えているとともに、3つの試験項目の全ての構成要素を8割以上が肯定的に捉えており、全般的に肯定的評価がなされていた。さらに、評価者からも、「どこがポイントか」がわかる評価項目である点や、「準備状況」がわかる試験問題(事例)である点など、概ね肯定的評価がなされた。今回実施した相談援助実習におけるOSCEの試験項目は、学生及び評価者の主観的評価によると、ある程度妥当であると評価されていることが示唆された。今後は、この示唆をより確実なものにしていくための詳細なデータの収集や分析が必要である。また、評価項目の改良に向けた検討事項も示されており、相談援助実習におけるOSCE試験項目をさらに充実させていくための検討も今後の課題であろう。

※本研究は、JSPS 科学研究費(挑戦的萌芽研究)26590114 の助成を受けた研究成果の一部である。